

「2018 年第 13 回中部 NGO-JICA 中部地域協議会」議事録

(以下、敬称略)

小川：お忙しい中、第 13 回中部 NGO-JICA 中部地域協議会にお集まりいただきありがとうございます。まだ着かれていない方もいらっしゃいますが時間になりましたので始めたいと思います。

本日司会をさせていただきます、名古屋 NGO センター理事の龍田様と私 JICA 中部の小川です。よろしくお願いいたします。

それでは最初に本日参加者の皆様から自己紹介をお願いいたします。

中島：名古屋 NGO センターの代表理事をしています中島と申します。お世話になります。所属はアジア保健研修所です。よろしくお願いいたします。皆さま、もう少し長めで団体の紹介も入れていただければと思います。1人1分ずつぐらいでお願いします。

河合：皆さま、こんばんは。今日は後のほうで事例を紹介します。泉京・垂井の河合と申します。後で言いますので、僕はこのぐらいでよろしくお願いいたします。

瀧本：こんばんは。NPO DIFAR の現地代表ボリビアの代表をしている瀧本里子です。私も後で紹介しますので、よろしくお願いいたします。

後藤：皆さま、こんばんは。イカオ・アコという団体の代表をしています後藤と申します。草の根は実はもう 3 回目で、この 9 月にそれが終了することになります。今回はいろいろと勉強させていただこうと思っています。よろしくお願いいたします。

村山：村山佳江と申します。名古屋 NGO センターの事務局の所属です。後ほど、国際協力カレッジの報告をします。よろしくお願いいたします。

八木：こんにちは。名古屋 NGO センターの八木と申します。所属団体はペシャワール会名古屋と不戦へのネットワークというところで活動しています。よろしくお願いいたします。

伊藤：私は伊藤と申します。名古屋 NGO センターとニカラグアの会の事務局をやっています。よろしくお願いいたします。

石田：こんばんは。西アフリカのブルキナファソのほうで学習環境の改善活動を行っております、ル・スリール・ジャポンの石田と申します。4月から11月ぐらいまで、また現地に行きますので、なかなか日本にいませんので、少し飛び入りで申し訳ないのですが、事務局を担当しています妻を連れてまいりましたので、よろしくお願いいたします。

石田久美子：いろいろと勉強させてください。石田久美子です。よろしくお願いいたします。

筒井：名古屋 NGO センターで政策提言をやっております筒井と申します。よろしくお願いいたします。名古屋 NGO では、あと他にボランティアでアイキャンやハンガーゼロのほ

うでお手伝いさせてもらっています。あと私の地元は安城なので、安城の防災の関係の団体で活動をしています。よろしくお願いいたします。

石本：こんばんは。一般社団法人 **Bridges in Public Health** の事務局をしております石本と申します。私どもの団体は東ティモールの地域保健活動を支援していきまして、草の根の応募に向けて鋭意準備中です。今日はいろいろと勉強させていただきたくてまいりました。よろしくお願いいたします。

三ツ松：こんばんは。地域の未来・志援センター事務局の三ツ松と申します。よろしくお願いいたします。環境の中間支援組織というような団体です。先ほど小川さんにも少しお話させていただきましたが、中部リサイクル運動市民の会がいろいろ中間支援というものがいいのではないかとということで、15年ぐらい前にそこから派生して設立された団体です。今日は初めて参加させていただきます。どうぞよろしくお願いいたします。

由井：こんばんは。JICA 中部の由井と申します。前回まで参加していました佐藤の後任で、草の根の事業を担当させていただいています。よろしくお願いいたします。

青木：JICA 中部連携推進課の青木と申します。広報や民間連携、なごや地球ひろばの運営会議などを担当しています。よろしくお願いいたします。

村上：こんばんは。JICA 中部の研修業務課長の村上と申します。よろしくお願いいたします。

内島：皆さま、こんばんは。JICA 中部連携推進課長の内島と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

木下：こんばんは。JICA 中部次長の木下と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

阪倉：同じく JICA 中部の所長をしております阪倉と申します。昨年、一昨年に続いて、今年も少しメンバーは変わっていますが、引き続きよろしくお願いいたします。今日のテーマ「ローカルとグローバル」というのも非常に楽しみにしていますので、どうぞよろしくお願いいたします。

龍田：名古屋 NGO センターの理事と AHI の理事もしています龍田と申します。コーディネーターをずっとしています。よろしくお願いいたします。

小川：ありがとうございます。それでは、議事のとおりに進みたいと思います。本日お配りしております資料ですが、表に次第と出席者リストがありまして、ゼムクリップを外していただきますと、資料ごとに資料 1、2、3、4 という形でホチキス止めしていますので、適宜使いやすい形でご覧いただければと思います。それでは、開会のあいさつを中島代表理事にお願いいたします。よろしくお願いいたします。

中島：ありがとうございます。今日は今までの全員揃われますと NGO 側が一番多い、中部地域協議会の参加者数になります。本当に皆さまの参加を感謝しています。中部の先進性と言いますか、特に全国の協議会のほうで、やはり中部は最近注目されています。東京や関西に比べると、小ぶりの NGO が多いという点は、何か引け目を感じ

るところも前はあったのですが、最近やはり全国の中で、それが逆に地域に密着した、地域の課題を解決する在り方、それを海外でもつなげよう、または SDGs の視点で取り組もうとしているという在り方自体が非常に、ある意味先進性を持っているのではないかと段々と思えてきました。それは全国のさまざまな NGO との対話の中で感じています。

特に、皆さまも私も何回も言っていますが、2016 年の G7 と平行して、市民サミットが開催されまして、その実施に当たっては、現在の東海市民社会ネットワークと呼ばれる、岐阜と愛知と三重の NGO、NPO のネットワークができて、そこが母体になって、市民サミットを実施しました。その後、3 年間さまざまな研究活動、また勉強会なども進めてきました。そして、またさらにこれから 3 年間延長して、その活動を SDGs に焦点を当てて、この地域でその取り組みのモデル都市を選定して、そこに取り組むことという大きな野望を抱いて 3 年間、これからまた 4 月から進めようとしています。

また、人づくりにおきましては、後でまた職員の村山からもありますが、国際協力カレッジも全国でも注目されていますし、外務省のバックアップをもらって N たまという NGO になりたい人たちのためのコミュニティカレッジも 16 期を迎えまして、ここにも N たまの卒業生もいらっしゃいますけれども、NGO のインキュベーター的な働きをしているということで、これも全国から注目されています。

そして、何よりも中部地域協議会自体が、また全国で注目されていまして、現在のところ、全国の NGO-JICA 協議会が年に 3 回行われているのですが、来年度からできれば NGO のコーディネーター側では、JICA 側コーディネーターに提案しているのは、地域協議会をベースにして、そして、全国はその報告をするという形に変えていこうという動きがあります。最終的には JICA さんの承認というか協議の上で回っていくわけですが、今、持たれているもの、スタイル自体を全国のモデルにしようという動きが今、起こってしまして、そういう意味で本当にこの地域の取り組みが全国に発信されて、また広がっていけばいいと思っています。今日、2 時間の間でよいディスカッションができればと思っています。よろしくお願いします。

小川：ありがとうございます。今、山田さんが到着されましたので、一言、自己紹介を頂いてもよろしいですか。突然、すみません。着かれてすぐで。

山田：遅くなって申し訳ありません。こんばんは。NPO 法人日本ボリビア人協会の理事長として勤めています、山田ロサリオと申します。よろしくお願いいいたします。

小川：ありがとうございます。それでは、次第に従いまして、続きまして、報告事項ということで、まず一つ目です。2018 年度草の根技術協力事業の応募状況と 2019 年度の募集予定についてということで、内島のほうからご報告させていただきます。資料のほうはございません。

内島：改めまして、JICA 中部連携推進課の内島より、報告事項が本日 4 つございます。前

半の2つは JICA 中部連携推進課からのご報告で、うち一つ目は、私、内島より簡単なものですがご報告を口頭で申し上げます。

今年度の草の根技術協力事業の応募状況ということで、今回も例年どおり、パートナー型、支援型、それから地域提案型という3種類のメニューで、今年度は1回のみでの募集をさせていただきました。応募いただいた案件の審査を現在行っている最中です。年度内には採択結果を出そうということで、今、後半の段階に差し掛かっております。今年度は、パートナー型は2件のご応募をいただきました。また、支援型については3件のご応募をいただき、地域提案型については3自治体というのでしょうか。3案件のご応募をいただいているところです。予算の関係もありますので、全案件採択できるかどうかというのは、なかなか難しいところで、できるだけ多くの案件を中部地域から採択できればということで、いろいろな、例えばピアリング、審査の作業を進めているところです。簡単ですが、ご報告申し上げます。

また、来年2019年度については、まだ詳しいところは決まっていますが、現時点の予定としては、来年度は例年どおり、通常どおりと申し上げてよろしいでしょうか。2回の応募をさせていただく予定になっています。今年度、2018年度は1回のみでしたが、来年度は先ほども申し上げましたように3つのメニュー、事業の形態、スキームについて、年2回の応募をさせていただこうということで、準備中です。まだ詳細は決まっていないので決まりましたら、もちろんホームページ上でも詳しい情報を載せますし、またいろいろな機会、媒体と言いますか、報告を通じてご案内をさせていただきたいと思っています。

先ほど自己紹介の中で、今応募に向けての作業中ですといった団体さんもいらしていただいて、大変ありがたううれしい限りですが、多くの案件のご応募いただけますように改めまして、よろしく願いいたします。私からの報告は以上です。ありがとうございます。

小川：ありがとうございます。ただ今のご報告に関しまして、何か質問等ありますでしょうか。

後藤：よろしいでしょうか。今、中部地域からの応募ということで、2件、3件、3件という数字をお教えいただきました。全国ではどのような数字が挙げられているのでしょうか。

内島：ご質問ありがとうございます。全国の数字は私どもまだもらえていない状況でして、分かる範囲で、もしかすると分からないというご説明になってしまうかもしれませんが、お調べした上でまたご報告できればと思います。申し訳ございません。

小川：他にご質問よろしいですか。それでは、遅れて来られた方、すみません。着かれてまだコートも脱ぐ前で大変恐縮ですが簡単に一言ごあいさつをいただけますでしょうか。お願いします。

北奥：すみません、遅れました。政策提言委員をしています北奥と申します。よろしくお

願ひいたします。

小川：ありがとうございます。続きまして、報告事項の2つ目です。中部4県のNGO等アンケート調査結果についてということで、私のほうから簡単にご報告させていただきます。お手元の資料1になります。アンケート調査の目的は前回、ご説明申し上げましたけれども、先ほども今年の支援の状況等々、数のお話がありましたが、やはり、これから海外で展開していこうとされるような支援型に応募される団体さんはコンサルテーションを含めて必ずしも多くない状況にあります。

他方で、地域に根差して活動しているNGOの方々はたくさんいらっしゃいますので、そういった方々に私どもの事業を知っていただくことで、海外での活動にシフトしていただけるようなきっかけになるのではないかなという、そのきっかけ作りということも含めまして、ご案内したいということでアンケートを実施した次第です。4県の89団体に対してアンケートを配布しました。すでにJICA事業に深く関わっていらっしゃるような、あるいは、実績がある団体は外したのですが、残念ながら回答いただけたのは内14団体で16%程度です。静岡、岐阜からは回答いただけないという状況でした。回答数が少ないのと、私どもの使用目的が今後の草の根への関心潜在層の掘り起こしと考えておりましたので、今日は細かな中身の説明は省きますけれども、後で資料をご覧くださいと思います。ポイントは、思った以上にJICAの草の根技術協力を知らない団体さんがいらっしゃるということと、知っているけれども、応募は考えたことがないという回答が全体の半数いらっしゃいました。このような方々は今後の潜在的な応募者層というような言い方ができるのではないかと考えています。私どもはさまざまな研修やイベントをやっておりますので、アンケートでお答えいただいた連絡先に関連情報を送ることで、何か今後につながるきっかけになればいいと思っています。

ページをめくっていただきますと、4.が活動分野ということで、これはNGO登録されるとき、国内での活動分野という指定がありまして、それと同様に少し国際協力の部分を膨らませてアンケートにご協力いただきました。ざくっと見ていただきますと、13番の子どもの健全育成、子どもの貧困といったところに関わっていらっしゃるNGOさんが非常に多いというのが一つの特徴だと思います。それから、5.のほうではどのような事業形態かということで、物資や資金を支援している、あるいは友好親善等々の目的なのか、あるいは今後JICA事業に関わっていただけそうな技術的な指導をやられている団体なのかといったところを把握するために行ったアンケートです。物資や資金、交流といったところの活動がメインとされているところはかなり多いという印象です。

以上、簡単ではありますがご協力いただきまして、実施しましたアンケートの結果ということでご報告をさせていただきます。この件で何かご質問等ありますでしょうか。よろしければ、続きまして3つ目の報告事項、NGO-JICA定期協議会（全

国)の前の報告と今後の動きについてということで、中島代表理事から資料は2番になります。ご報告をよろしくお願いいたします。

中島：前回、去年の11月13日に第2回が実施されました。資料の2-1はそのときのアジェンダと申しますか、次第になっています。主な議題としましては、そこにありますように年間テーマ・アクションプランについてということが中心です。その次のページの2-2を見ていただきまして、その中でも特に国内連携強化、JICA ボランティアと NGO との連携推進、草の根技術協力案件の質の向上と3つあったのですが、年間テーマの中の一つである国内連携強化について特にご報告させていただきます。

国内連携強化は、横長の資料のアクションプランがありまして、その中の特に今回ご報告するのは、多様なアクターとの連携促進ということについて、ここでは報告をさせていただきます。こちらの多様なアクターとの連携推進に関してはそれぞれ地域の NGO と地域の JICA さんと連携して、そこにマルチステークホルダーでさまざまな学習活動やリソースの有効活用など進めることをしています。そのテーマにつきましては、現在の進捗状況がその後の資料の中に出てきますが、その報告をしまして、そして、それに関連して JICA さんのほうから多様なアクターとの連携推進、SDGs の取り組みなどということで、資料の 2-2 に戻りますが、その中で求める人材がない。国内連携強化の 2 段落目のところです。国際協力の関心低下というのがありまして、特に、青少年など若い人たちの間で、海外で仕事をしたくない子どもたち若年層の安定化志向が増しているということが、JICA さんの数字的な調査の結果、そのような報告がありました。そして、その対策として JICA としては「国際協力キャリア」という範囲をもっと広くして「国際キャリア」と言い換えると、もう少し幅広い人材がそこに集まっているということで、人材確保につなげようという、そこに打って出ようということをされています。

そして、また NGO 側としては、特に名古屋の NGO センターからは、そこにありますように、NGO 等提案型プログラムにより、3 年間の人材育成のプログラムをしています。非常に間接経費も高く、ネットワーク NGO にとってもありがたいということをご報告しました。また、先ほど申し上げた N たまを実施してまして、16 年目で 18 名の受講生がいることを報告しました。そして、以上を受けて議論としては国際協力の人材の裾野拡大のためには、日本の課題の取り組みも視野に入れる必要があることは次のことから言えるということで、例えば、海外で良いことをしていても日本で評価されなければ駄目です。また、高額の仕事をやめて起業する人の増加があります。そして、JICA の中学校でのエッセイコンテストのテーマでは日本国内の課題が増えています。このような議論がありまして、そして、最後にネットワーク NGO が地域の中で弱体化するということは、地域の中小 NGO にとってもその影響があるということです。そのためにも、中間支援するネットワーク NGO の組織力アップ、財政強化、間接費アップなどによる必要があるという話し合い

が持たれました。

次のページにいきまして、もう一つのアクションプランである草の根技術協力の質の向上ということに関して、簡単にご報告します。こちらのほうは、NGO側が東京のNGOを中心にそれぞれ特徴的なNGOのベストプラクティスが2回のワークショップを通して紹介されました。それを分析しました。そこでは、NGOの強みが以下のように抽出されたということです。一つ、NGOの特色として、現地の人だけで考えた場合には出てこない課題を抽出し、取り残された人々にリーチする。もう一つは、ボトムアップアプローチを基本とし、現地のニーズを発掘するがそれを分野横断的な案件とすることもある。もう一つは、特定の地域と長く関わった経験や、その地域の特性を生かした柔軟な活動を行い、現地のリソースを活用する。そして、行動変容を目指します。現地における信頼関係を生かす。中立性を保つなどが挙がっていました。

ここには書いていないですが、もう一つのアクションプランの柱である、JICAボランティアとNGOとの連携推進という課題に関しましては、愛知のNGOであるアイキャンの井川さんをコーディネーターとしてこの課題を進めていますけれども、JICAボランティアの本邦NGOへの派遣ということで、どういう連携ができるかということ全国の86のNGOにアンケート調査をしまして、その結果、ほぼ全部のNGOがもし課題が解決されれば、JICAボランティアを現地日本人駐在、今人材不足もあるので、ぜひJICAボランティアが現地の日本のNGOの駐在のような形で連携できないだろうかということ提案しています。それに関しては、なかなかまだ現在のJICAの制度の中でボランティアの採用権ですとか、現場の受けるところの指揮権、管理権など、それから、管理費をどうするかということもハードルがありまして、現状ではなかなか難しいというJICAからの回答があります。

そして、第3回に向けましては、先ほど、あいさつでも申し上げましたけれども、2019年度は現在のところNGO側の提案として地域協議会をベースにして全国を最初と最後の2回を開催するところを提案しております。そこで、地域協議会で挙がってきたいろいろな課題などについて、また報告を受けて次に進んでいくという形を取りたいということ提案しています。また、地域協議会を展開していく場合に、NGOのみならず、NPOも地域の課題に取り組むNPOやそれから企業や大学などマルチセクターで地域協議会が持てるようになるという意見も全国で展開する場合の案としてNGO側から出ています。今回も特に地域の未来・志援センターの三ツ松さんや日本ボリビア人協会の山田さんもいらっしゃっていますし、まさに、この場が少しずつ裾野を広げていく地域協議会の第一歩として進めていければいいと思っています。以上です。

小川：ありがとうございました。今のご報告に関しまして何か質問等ございましたら、お願いいたします。石田さん、どうぞ。

石田：少し前に外務省の方が ODA 関係のタウンミーティングということで、NGO が集まって話したことがあったのですが、そのときに 2004 年ぐらいと先ほどの 2018 年ぐらい。例えば、Google で国際協力でやったらどれぐらいヒットするかということで、すごくヒット数が全く違ってしまっています。先ほど、若い人材がどんどん興味をなくしているのではないですが、そういうのは例えば、協力隊事業に関わられている視点からすると、何か協力隊に応募される方、終わった後の進路に何か、傾向、変化というのは見られているのでしょうか。隊員をやられた後のその後の進路など、何かこの 10 年ぐらいに変化があったのかと思います。何か違いがあるのかと思わせて。

小川：ご存じのとおり、まさに石田さんもそうですが、協力隊員を終わられてから、昔から、あるいは NGO 活動に入られる方というのは相当数いらっしゃると思います。それが多いのか少ないかというトレンドは多分、押さえてないのではないかという気がします。あとは、国際協力に関心がある方はいらっしゃるのですが、それと国内での就職の活動といったところは、相関関係があると言われておりまして、国内で比較的就職がしやすい時期、景気が良かったり、求人が多い時期だったりすると、あえて海外に行かなくても国内で仕事をしたいという方もいらっしゃるの、そちらが増えてきます。逆にそちらがなかなかうまくいかないといったときに、外に志向される方が増えていくというような関係は見られるのではないかと思います。具体的に数値でと言われますと、今は分かりかねますので、それからトレンドみたいなものがこれまで資料等々であるのかどうかというのは確認してみたいと思います。

阪倉：あまりお答えにならないかもしれませんが、JICA 中部でも例えば、帰国隊員の人たちに報告会をやってもらうというのを年に 1 回、あるいは 2 回やっています。最近もやったところですが、東京でも同じようにやっていて、東京のほうが当然やはり、人数の規模は大きいです。NGO さんに行く帰国隊員が多いか少ないかというのは、今申し上げたとおり分からないのですが、最近の傾向として自治体の担当者の方が、多数報告会に来られて、それで要するに地域の仕事をしてくださいということで、これは例えば、民間企業の方も来られます。ただ、民間企業の数というのは、この間見ていた限りは少しずつ増えていますが、自治体の数はすごく増えていました。そういう意味で言うと、NGO さんに行きたいという隊員が増えても全然おかしくはないという気がしますけれども、目立ったのは自治体でした。

中島：1 点補足です。こちらの次第のほうの最後にあります、JICA 基金についてという項目がありまして、こちらのほうは JICA のほうから、今まで JICA 基金で 100 万円でしたか。伊藤様、ニカラグアの会はとられたと思いますが、これは、設立してから 3 年か 2 年という条件が付いていたかと思いますが、新しい JICA 基金の一つの枠が設立 2 年以内、3 年以内を取り払って、インキュベーター的に育てていこうということです。例えば、Bridges in Public Health さんは、まだ設立されてからまだ 2 年はた

っていないですよ。

石本：いえ、2年以上たっています。

中島：2年以上たっていますか。これを使うとされているということを樋口さんから聞いたのですが、タイミングがずれてしまってということを知ったのですが、そのように本当にNたま生を卒業したてで、何か新しい活動を進めていくときのシードマネーとか資金に使えるという形で紹介を受けました。皆さん、NGOの方もそういう枠があるということで、今後また草の根につなげる一つのファーストステップとして、JICA基金も考えられたらどうかと思います。

小川：今のお話に少し補足させていただきます。まさに、従来2年だか3年、私も今すぐに思い出せなくて申し訳ありませんが、今年度はチャレンジ枠という形でそこを取った新しい枠を作ったという改善がなされました。ですから、これまで実績がないと駄目だと思われた団体もチャレンジ枠ということで応募が可能になるケースもあります。直近の募集はもう終わりましたが、また、ホームページを見ていただければと思います。

それでは、よろしければ、報告事項の最後になります。2018年度「国際協力カレッジ」の実施報告をNGOセンターの村山さんをお願いします。ご報告いただく前に、すみません、私のほうから1点お詫びがあります。資料は3番になりますが、9ページを開いていただけますでしょうか。元々の原稿はカラーでいただいていたのですが、経費削減もありまして白黒で印刷しています。グラフに色が付いていないので見にくいと思いますが、12時を起点としまして、時計回りから右にとても良かった、良かったと、すべての円グラフはその順番になっています。例えば、9ページですと59%がとても良かった、良かったが38%で普通が4%です。どの円グラフも12時を起点に時計回りでとても良かった、良かった、普通というように上から下に流れている順番になっていますので、その旨ご留意いただきたいと思います。それでは村山さん、ご報告よろしく願いいたします。

村山：名古屋NGOセンターの村山と申します。よろしく申し上げます。毎年、開催をしていて、皆さん耳にされていることと思いますが、改めて国際協力カレッジの報告をさせていただきます。

1ページ目のところで、本事業の目的および目標というところを3行ぐらい読んでみます。国際協力カレッジは、中部地域において国際的な課題に関心を持つ若年層を中心とする人々が国際協力の現場で働く人の声に触れ、考え、共に動き始める場として2006年度より実施しており、本年度で12回目ということで、非常に昔から開催をしていて、このイベントに多くの方が参加をしてくださってきたものになります。

先ほど、中島さんのほうから、国際協力への関心低下があり、それは海外で仕事をしたくない、若年層の安定化志向が増したというご報告があったのですが、一方

でこの国際協力カレッジに参加される方というのは、今年も、例年以上に参加者数が多くて、参加者数 76 名でした。定員 70 名に対して 76 名だったのですが、実は、申し込みを受け付けたのは 101 名でした。開催が土曜日で、土曜日の朝一はこれまでの傾向ですとドタキャン率も高いということで、定員 70 名を超える人を募集して、受付をしまして、結果的に 76 名でした。相変わらず、国際協力に関心を持っている若年層は多いということは一つ言えると思います。

このカレッジは午前中にゲストの方のお話を聞いて、午後に行動につなげるということで今年は 4 人のゲストの方にお越しいただきました。3 ページに紹介していますが、企業の方としてクリスタルの木下さん。NGO の方として、AHI の高田さん、AfriMedico の町井さん、そして JICA から青木さんにご参加をいただきました。

午後につきましては、7 ページ目に載っていますが、各 NGO 団体、それから JICA さんなどに参加していただきまして、そこで直接団体の皆さんから話を聞くという場で、ボランティアやインターンができる団体を探して、まさに行動に踏み出そうという場を提供しました。

9 ページ目をご覧いただいて、最後に全体会で振り返りをしまして、会場いっぱいに参加者の方、それから出展団体、ゲストの方、スタッフが一緒になって振り返りをしました。少し参加者の方の感想を読み上げますと、「今まで保健と医療の分野に関心を持っていたが、他の分野とのつながりがあることが分かった」、「こんなに多くの若い人が国際協力に関心を持っていることが分かった。将来に期待が持てると感じた」。9 ページ目の先ほどのグラフですが、とても良かった、良かったという方が大半をご感想としていただいています。

11 ページ目のところに載っている問 6 に参加者の内訳が書かれています。以前にも「国際協力カレッジ」に参加された経験はありますかというところで、はじめてという方が 95%です。毎年こういったイベントのニーズは非常にあると思います。そして、その隣に年代をお聞かせくださいということで、10 代以下の中学生や高校生の方もちらりほらりと参加をされています。20 代が 46%と、10 代、20 代で半数以上を占めるということで、若年層の参加が非常に高いです。

同じく 11 ページ目の上の辺りです。問 4 の感想で、3・4 時間目「ボランティア・インターン マッチング展」はいかがでしたかというところで、「とても良かったです」の感想に今日、ご参加いただいている DIFAR さんのお名前が載っています。「三重県から来ていたので DIFAR さんと会えてよかった」というような感想もいただいています。国際協力カレッジに 12 月に参加をした方が、2 月には DIFAR さんのスタッフとして、違う場でお会いさせていただきましたので、この場で出会って、団体さんで活動を始めたという事例を目にして、すごくうれしかったと思います。

そして、12 ページのほうをご覧ください。こちらは出展団体のアンケート結果というのも少しまとめて掲載をさせていただきました。概ね、ご好評をいただいでい

たかなというふうに思います。問 2 のところで「ボランティア・インターン マッチング展」についての感想をお聞かせくださいのところに、来年の改善点として、アンケートにボランティアを希望する団体名を書く、個人の連絡先を開示してもらうなど、マッチングの「仕組化」をしてもらいたい。これについて直接団体さんから伺いまして、カレッジに初めて参加された団体さんが、個人情報関係ですごくナーバスになっていらっしゃる場所もありまして、この会場の場で連絡先をいただいで大丈夫なのかどうかというところが分からないままに当日進行してしまって、参加者の方から個人情報を聞くことができなかったそうなのです。他の団体さんは基本的にその場で任意で書いていただいて、後日すぐ連絡するというスタイルを取っていらっしゃるのですが、初めて参加された団体さんに周知されていなかったで、来年度は徹底するべきだと思いました。

同じく 12 ページ目の問 3 で今回の「ボランティア・インターン マッチング展」で、実際にボランティアやインターンを希望する人はいましたかというところに、実際にボランティア・インターンを希望する人がいたというのが 40%。平均すると 1 団体 9.5 名ぐらい。話は聞きに来たけれども、実際にボランティア・インターンをするかどうか分からないという方が 60% ぐらいということで、非常に次につながる機会になっていたと数字上でもうかがえるかと思います。

13 ページ目に問 5 として、アイデアや改善点などがございましたら、お聞かせくださいというアンケートの中に、「もっと頻繁にこんな機会があったらいいなと思った」というのが非常に多くありました。アンケートだけでなく、生の声として参加者の方からも伺いますし、出展団体の方からも伺っています。国際協力という分野に関わりたいという人と出会うチャンスがなかなかなく、イベントやブース出展をする場所というのは、他のイベントでもあるのですが、国際協力が多様な分野の一つになるので、参加者層としては分散してしまう。国際協力カレッジは、非常にダイレクトな層というところで、参加者と出展者の双方からこのようなご意見をよくいただいております。あとは時間がないので、また、もし可能であれば、皆さん、アンケートの集計などをご覧下さい。これで発表を終わりたいと思います。ありがとうございました。

小川：ありがとうございました。トークセッションで実際に 1 コマ持たれた青木さんもうらっしゃいますけれども、何か、青木さんの感じたことなど印象があればご報告を簡単をお願いします。

青木：私は今回初めて参加させていただいて、登壇の機会をいただいたのですが、特に個別のセッションで皆さん、非常に熱意がありまして、いずれの会も時間がもう足りないという感じで、質問を受け続けるというような形でした。いろいろな統計で言うと、一般には若い方の関心が下がっているということも聞くのですが、やはり非常に熱意を持っている方はまだまだたくさんいらっしゃると思いましたし、今回、

定員をはるかに超えるご応募もいただいていたということです。確か、当日はイギリスか何かから、これに合わせて一時帰国してというぐらい非常にこの機会は重要だという声も頂いていたので、そういうところで今、期待に応えていくのが非常に重要だと思います。私も登壇の機会は非常に光栄でした。ありがとうございました。

小川：ありがとうございます。それでは、ただいまの国際協力カレッジのご報告に関しまして、ご質問等ございましたらお願いいたします。はい、どうぞ。

瀧本：質問ではありませんが、私たちも今回初めて参加させていただいて、本当に先ほどおっしゃっていたように熱意がすごくて会場に入りきれないぐらい、会場がいっぱいになるぐらいの参加者の方がいらして、先ほど村山さんがおっしゃった平均の大体 9 名ぐらいの方たちのコンタクトを頂いて、その人たちに後で、電話やメールで連絡を取って、例えば、広報が得意な人は広報ならば協力できます、イベントの出展ならば協力できますなど、近場の人というのはすごく具体的にマッチングができて、先ほどもおっしゃっていた 1 人の方は、この目で DIFAR を見て、でも、一体どのような団体なんだろうというふうに 1 年半ぐらい思っていて、やっと国際協力カレッジで出会って、すぐに何でもいいのでやらせてくださいという感じで本当にマッチングしました。なので、このような機会は本当に NGO の方たちが参加して、関心のある人たちが参加するすごくいい機会なので、ぜひ参加されたらいいと思いました。

小川：ありがとうございます。他に何かご質問等、あるいは、ご意見等ありますでしょうか。ご質問等ないようでしたら、これで報告のセッションを終わりにしたいと思います。休憩に入る前に、今、丹羽さんが到着されましたので、一言ごあいさつただけですでしょうか。お願いいたします。

丹羽：名古屋 NGO センターの丹羽と申します。遅れてすみません。NGO センターで広報を担当しています。

小川：ありがとうございました。それでは、ただいまから 5 分間休憩に入らせていただきます。この正面の時計で 5 分後の 31 分ぐらいに開始し、協議に移りたいと思います。よろしくようお願いいたします。

龍田：いろいろところで会話が續いていたように思います。では、休憩時間が終わりました時刻になりましたので、協議事項の後半部分を始めさせていただきたいと思えます。後半は議題としては「ローカルとグローバル、SDGs の視点から国内、海外の課題に取り組む」というような形で発表を 2 件、NGO からさせていただきます。まず、泉京・垂井の河合さんからお話を頂いて、その後、一緒に少しやられていた方で、三ツ松さんがいらっやっていますので、そちらのほうからもコメントを頂きたいと思っています。その後、DIFAR の瀧本さんからボリビアでの活動や東栄町と一緒に活動も含めてご紹介いただいて、ボリビアつながりということでロサリオさ

んにまた少しお話を伺いたいと思います。それでは、泉京・垂井の河合さん、よろしく願いいたします。

河合：皆さま、こんばんは。泉京・垂井の河合と申します。座って説明させていただきまず。初めての方もいらっしゃると思いますので、私の自己紹介と垂井という地域も少し紹介できたらと思います。私は河合良太といいます。よく聞くかもしれませんが、良く太ると書いて良太ですので、よろしく願いいたします。先ほどから出ている N たまの修了生でもありまして、10 期生です。もう 6 年、7 年前ぐらいです。修了した後に、垂井という地域の泉京・垂井で働き始めました。今日、ここに N たま生が何人か来ていますが、同期もいます。僕はこのような感じです。泉京・垂井と、今は地域の未来・志援センターというところで両方の事務局をやっています。趣味はひとり呑みですが、少し飽きてきて呑む人を募集しています。いつか呑んでください。

次へお願いします。今日は泉京・垂井の垂井というのは垂井町という地名です。垂井は岐阜県的美濃地方で、下の南のほうのさらに南の西で、西濃地域というところにあります。人口は大体 27,500 人で、関ヶ原の合戦で有名な関ヶ原町と岐阜第二の都市の大垣の間にあります。垂井アクセントと言って、言語学上非常に重要らしいです。ちょうど東と西の間のアクセントのようなところですが、後でお話しますが水文化が非常に独特で、特有で面白い水文化がたくさんあります。旧中山道が通っておりまして、垂井宿という宿場町があります。美濃の国府があり、美濃地域の一宮の神社である南宮大社があり、歴史の深い町でもあります。戦国時代が好きな方は竹中半兵衛のゆかりの地というところで、大河ドラマで垂井が出たときには、垂井がざわついたこともありました。これも後から話しますが、フェアトレードタウンも目指しています。次へお願いします。写真です。このような感じで、曳やままつりや、これからの季節は鯉のぼりが泳ぐ相川というところですが、今年は 5 月 26 日ですが、ここの公園で第 9 回フェアトレードデイ垂井をやります。このような地域です。

もう一つ、私たちは揖斐川流域という川の流域で地域づくりをしていこうということで、揖斐川流域の紹介も少ししたいと思います。木曾三川の一番西側です。木曾川、長良川、揖斐川の揖斐川です。揖斐川は、岐阜県の冠山というところが水源地ですが、そこから流域で言うと滋賀県一部も入りますが、岐阜から三重の桑名に流れる全長約 121 キロメートルの川です。揖斐川流域はどのようなところかという、大体人口で言うと合わせて 60 万人ぐらいの人が住んでいる地域になります。これが揖斐川流域の風景です。右上は徳山ダムという浜名湖の 2 倍ぐらいの貯水量がある大きなダムです。右下はよく社会の教科書に出てくる堤防で囲まれた地域で輪中という地域です。左側が揖斐川で右側が長良川、一番右にあるのが木曾川です。下流にいきますと、「その手は桑名の焼き蛤」のハマグリやシジミの漁で有名な赤須

賀漁港というところがありまして、ここは若い人たちが漁師としてやっていて生業としてご飯を食べているというところになります。

このような垂井町や揖斐川流域で地域づくりをやっているのが、私たち泉京・垂井という団体です。基本的な情報はこのようなものです。専従職員が 0 名というところで何とかやっている団体です。泉京・垂井のビジョンですが、住民が愛着を持ち、豊かに暮らし続けられる町を目指そうということを掲げていますが、その根底にある考え方が「穏豊（おんぼう）社会をみんなで実現していこう」という考え方があります。この「穏豊（おんぼう）」というのは、穏やかで豊かを書いてありますが、これは私たちの団体の副代表理事が作った造語です。私たちの副代表理事は元々 ODA のコンサルをやっているという過去があります。

また、それから NGO のほうで活躍をしているという人で、その人が東南アジアにエビの養殖場に行ったときの話をよくしてくれるのですが、「お前は何でこんなところに来ているんだ」とよく言われたそうです。最初は意味が分からなかったのですが、「地域を良くするために来ているんだよ」と話をしたら、その人に「お前はここに来るんじゃないで、日本を何とかしろ。日本が変わらなければ、私たちの地域も変わらない」という話をされたということで、それではっとして、日本の地域づくりを何とかしていこうと思ったそうです。そのときに、そのようなところから生まれた言葉が「穏豊（おんぼう）社会」という言葉になりました。

具体的には、私たちの活動の根源にもなりますが、うばったり、うばわれたり、環境や人に負担を掛けたりするのではなく、環境にやさしい、人にやさしい社会です。人やお金や食料やエネルギーが流域の中でぐるぐる回る、地域の資源を生かした流域内の循環型社会を目指していこう。それが、「穏豊（おんぼう）社会」です。つまり、自分たちの地域だけがよくなればいいというわけではなくて、自分たちの生活や行動は実は世界とつながっていて、もしかしたら、違う国に迷惑を掛けているかもしれないし、逆に自分たちが迷惑を掛けられる立場になるかもしれない。収奪行動によるのではなくて、お互いに助け合いながら、自立した地域を目指して、みんなで豊かになろうということを目指した言葉です。これは SDGs に通じることかとも思いますし、ローカルとグローバルの両方の視点が入っている言葉でもあります。

このような「穏豊（おんぼう）社会」を目指して、泉京・垂井は「幸福度の高いまち・垂井」というのは定款に書いてあるのですが、そのようなことを目指して、垂井町や揖斐川流域で地域づくりを行っています。今回、少し、グローバルとローカルというところの視点で活動紹介を 4 つぐらいさせていただこうと思います。

まず、フェアトレード事業です。私たちはこの地域でフェアトレードをやっています。流域内の循環型社会である「穏豊（おんぼう）社会」を目指すために、フェ

アトレードの視点を地域の生活に取り込もうという活動です。ですから、途上国の生産者の自立支援という狭義の意味ではなくて、もう少し大きな循環型社会に帰するような活動をしていこうということをやっています。左上は揖斐川町の春日地区という揖斐川流域の源流に近いほうですが、ここのお茶屋さんのお話がありました。お茶は市場でとても安く買ったたかかっているという状況があるそうです。また、お茶農家さんは高齢化が進んで、本当はお茶を売らなければいけないのですが、生産をするので精一杯ということでした。お嫁さん同士が少し立ち上がりまして、お茶農家さんから、きちんとしたお茶を作って、そこから買い取って、それを製品化してブランド化し、この地域で売っていこうということをやられている方がいらっしやいまして、その方とお話をしていたら「これはフェアトレードだよね」というお話をしてくれました。僕の中ではフェアトレードは、最初は海外という国際協力というイメージがあったのですが、そのようなことが地域でも同じ問題が起こっているのだと感じ、そこから、元々そのような取り組みはあったのですが、私の中で地域のフェアトレードというのが腑に落ちて、活動していったということがあります。

そのような地域内の循環型社会や、持続可能な社会を作っていくという点でなかなか、循環型社会、持続可能な社会というのは難しいですが、例えば、フェアトレードという言葉になると若い人が結構、食い付いてくれて、「そういうことなのね」という話をしてもらえます。こういった面でも、グローバルとローカルというつながりを感じやすいと思っています。地域も世界も実は同じ課題があり、同じ視点で見られるのがフェアトレードというツールだと思っています。具体的にはフェアトレードデイ垂井という、先ほどの相川のほうで、今年は5月26日ですので、皆さんメモしていただければと思います。ぜひ、垂井に来ていただければと思います。

右上は町長さんも参加して、この年はフェアトレードとSDGsという形でトークイベントをやりました。地域の活動、地域のはちみつ養蜂場さんや、麻文化を復活させるとか、地域のおじいちゃんからいろいろな伝統文化を学ぼうという方がいたり、実際にフェアトレードをやっている方に登壇していただいて、SDGsは少し難しいけれども、皆さんが現場でやっている取り組みが、実はこのSDGsに関係しているのだというお話をさせていただきました。

あとは、皆さんはご存じだと思いますが、フェアトレードタウンというものがあります。フェアトレードを町中で応援しようというものですが、そこを垂井は目指しています。ダークホースと言われ、早5年ぐらい。なかなかできないでいて、今、いろいろなところに抜かされていますが、何とかフェアトレードタウンになりたいと思っています。この中ではいろいろなタウンになるという推進会議の他、中学校や高校で出前授業をしたり、住民や議員に対しての勉強会やイベントをしたり、商品開発なども今後していこうと思っています。今年初めて地元の高校でフェアトレードの砂糖と地元の野菜などを使ってマフィンを作ってくれて、それを垂井町のイ

ベントで売ることもやりました。旗艦店の運営という形で、100年ぐらいの古民家を改装というか、ここをお店として物品の販売やコミュニティスペースとして使っています。また、今、面白い形になってきてまして、ヘナの美容室やアトリエ、農業体験をする法人の事務所になっています。このような場で小さいながらもフェアトレードや水の管理やSDGsなどそういった勉強会をしています。このような場も地域と世界がつながる場になっていると感じています。フェアトレードはこのような形でやっています。

また、流域というところで地域づくりをやっています。流域をつなぐ事業もやっています。こちらはEPO中部と共同して、揖斐川流域のESD支援という形で揖斐川流域をESDの拠点の資料という形で絵本や動画を作ったり、一昨年は高校生が揖斐川流域を回るツアーをやったり、またその高校生が小学生を連れて同じツアーをやったりなど、揖斐川流域を教材として使いながら、持続可能な開発とは何だろうということを考えるということをやっています。

環境教育の面で言うと、実はNたまを通じて、私たちのところにインターン生が来てくれたのですが、そのインターン生がスリランカで協力隊として派遣されてまして、現地で環境活動なども担当しています。この右下です。先ほどの輪中地帯の輪之内町ということで、環境教育をやったり、ペットボトルの回収施設を運営しているNPOがあるのですが、その方は派遣前にここに行ってどのようなことをやっているのか、環境教育はどのようにやるのかというお話を聞いて、今、現地で活躍しています。これはスライドが違いますが、先ほどのESDの他に、インキュベーターという言葉もたくさん出てきましたが、里山インキュベーターいびがわという、地域資源をうまく活用しながら、小さな生業をできる人を育てていこうということをやっています。

その他にもアドボカシーの事業ということで、アドボカシーができる人を育てようという、あどぼの学校というものをやりました。左下ですが、このすぐろくをやるとアドボカシーを体験できるというすぐろくの教材なども開発しています。昨年度は岐阜県で開催しまして、実際にNPOに訪れてどのようなアドボカシーをしているのかをみんなで考えようということをやりました。地域にフォーカスしたり、このスキームを使って、国際会議に人を派遣して、国際会議に参加するなどして、大きな視点と小さな視点を行ったり来りするようなことを、あどぼの学校でやっています。

もう少し話しても大丈夫ですか。研修受け入れ事業もやっています。こちらは写真です。実はもう5~6年前ですが、JICAの研修のある一部分の地域のコーディネートをさせていただいたときの写真と、今のムラのみらい、このときはソムニードでしたけれども、ソムニードの屋外研修などの受け入れもしました。実は、先ほど言いましたように垂井町は水管理、マンボという横穴式井戸があり、伊吹山の伏流

水が湧いているところがありまして、そこが地域コミュニティで管理されているような、そういった水文化が独特の地域です。最初、ここに来るとこれは日本らしいというような、和服を着ている方もいて、日本らしいとなるのですが、お話をしていく中で、地域の水管理の共通点が見つかって、そういう中で感動した、これは参考にできるというような話になりました。また、地域側はこのようなところを地道に管理している地域のおじちゃんが先生になって、このような方々に教えます。そうすると、意気投合して、ときには先生と生徒という関係性や、同じ課題を解決する者同士みたいな関係性が生まれていきます。私たち泉京・垂井はあまり何もできませんが、地域の人たちや地域の特性が先生となって、いろいろなことを教えてくれたという経験があります。

もう終わりますが、皆様のご期待に応えられたか分かりませんが、私たちは常に地域と世界、大きなところと小さなところを行ったり来たりしながら活動しているというのが私たちの特徴だと思っています。垂井や揖斐川流域の取り組みは世界の課題を解決するというのもあるかもしれないし、またその逆もあるのではないかと考えています。やってきて少し感じたのは、ある講座で聞いたことですが、マッチングドフィット感というのが大切だと思っています。

例えば、私たちはフェアトレードが地域の課題を解決するというので、マッチする手段なのではないかと思いつつ、なかなかフェアトレードは広まらないです。その地域に合ったフィット感を大切にしながら、例えば、フェアトレードと地産地消という言葉に変えたり、フェアトレードはおいしい、安全だよという言葉に言い換えたり、そのような地域にフィットするようなやり方を考えていかなければいけないとやりながら思っていますが、いろいろ苦労しながらやっているという現状です。すみません。つたない話で時間もオーバーしましたが、以上で終わります。ありがとうございました。

龍田：どうもありがとうございました。最近、地域にこそきちんと一緒に学んでもらえるものがたくさんあるという形で、長野県の阿智村もいろいろなところで研修をして、そこで海外の人に学んでいただくというのは、結構増えてきているような気がします。一緒にいろいろされた三ツ松さんに少しお話を伺いたいと思います。お願いします。

三ツ松：河合さんとは地域の未来・志援センターと一緒に働いていますし、泉京・垂井のほうでもいろいろ一緒になってやっております。具体的には今、河合さんがお話をされた里山インキュベーターいびがわは、2018年度は地域の未来・志援センターと一緒に事業を行っております。なぜ、泉京・垂井と地域の未来・志援センターと一緒に仕事をしましょう、事業をやりましょうということになったかということ、私どもの団体のミッションは、環境問題に取り組むことですが、持続可能な地域のデザインをどのように歩めばいいだろうかということを探している段階でして、その

ためには、設立して 14 年ぐらいたつのですが、最初の 7~8 年をかけて地域の人々が自然資源を始めとして、人的な資源も文化的な資源も皆含めて、そういったものを自らの地域で生かして、地域を再構築していく。そのために、地域の人たちの自治力です。自らの地域のことは自らで考えていこうという力を付けていくのが大事なのではないかということで、そういうことを確認し合って、7~8 年前からその方針で活動しています。

西濃環境 NPO ネットワークという河合さんたち、泉京・垂井さんが所属している環境団体のネットワークとの出会いが数年前にあり、そして、中島さんが先ほどご紹介されていた東海市民社会ネットワークという中部、東海 3 県の NGO、NPO 主に中間支援の団体が連携する組織ができて、そこでお近づきになっていくところで、ほぼほぼミッションが共通しているので事業を一緒にやりましょうという流れになりました。ありがとうございます。

龍田：ありがとうございます。それでは、会場からご質問、ご意見ありましたらコメントなどをよろしくお願いします。コメントがないようですので、私から少し一つ。ローカルからグローバルという形ですが、今後何かグローバル、あるいは、自分のところにグローバルというか海外を呼んでくるなど、そのようなご予定や戦略はお持ちでしょうか。

河合：フェアトレードというものは地道にやっていきたいと思っています。もう一つは、最後に研修受け入れという形で海外からだけではないですが、企業や大学、NPO などの研修も受け入れているのですが、先ほど三ツ松さんも言った西濃地域、揖斐川流域での NPO のネットワークもありますので、そういったところと連携しながら、地域、地域の人、地域の自然が先生となりながら、実は共通している課題を世界も地域も一緒に考えていくような研修受け入れや、ツアー、フィールドワークなどを私たちはできるのではないかと思います。

龍田：ありがとうございます。確かに住民が自分たちの資源を探し、流域というか少し広いサイズ的环境を意識した開発というのは、いろいろとニーズが高くなるのではないかと思います。ありがとうございます。他にコメント、あるいは、ご意見、ご質問などがありましたら。

後藤：日本では流域単位でいろいろなことを考えるというのは当たり前に行われているかと思いますが、海外ではなかなかそのような取り組みは少ないと思っています。龍田さんの発言と少しかぶるかもしれませんが、グローカルの活動の活発化というか、人の充実がグローバルの問題解決につながってくるという、非常に面白い事例だと思って聞いていました。

直接グローバルの問題に挑戦するという話を龍田さんがされましたので、割愛しますが、フィリピンで今、流域全体で植林や環境教育、それから有機農業、それを受け入れるオーガニックカフェなど、そういう取り組みを今、始めようと思っています。

て、社会企業というつながりを作ろうと思っています。ちょうどいいヒントを頂いたと思いました。さらに少し質問させてほしいのですが、フェアトレードタウンの指定がなかなか取れないということをお聞きしましたが、どういう条件が足りないということでしょうか。

河合：最後、首長さんの宣言と議会の議決というのがありますが、そこです。首長さんは町長さんですが、いろいろと分かっていたかということだと思うのですが、議員さんには私たちからの働きかけもうまくできていないという現状があるので、その辺と、あとは4年に1回変わってしまうので、そこをゆっくりしていると、また選挙だということに今年はなってしまうという状態です。あと、先ほど、フィリピンのほうで流域でもというお話がありましたが、幾つか加えると、日本の川とフィリピンの川と流域間交流のようなこともしたらどうかと。名前は忘れましたが、棚田で有名なフィリピンの流域での地域づくりのようなこともさかんにされているというところもあるので、そういった違いと共通点を見つける流域間交流もできたらいいと思っています。

龍田：どうもありがとうございます。他にご意見ありますか。

石田：少し運営のことでお伺いしたいのですが、以前、ちょうど1年前ぐらい名古屋 NGO センターの資金調達に関しての研修に参加しまして、それで見ると、これだけいろいろなことをやられていて、やはり、専従の職員がいらっしやったというのが、そういう形ではなくなっているような気がしたので、今、これからどういうふうに、また専従の職員をきちんと配置する計画をされていて、もしかしたらそこに向かっていくけれども、どのような問題があるのかということ、私も勉強したいところです。

河合：ドキドキの質問です。ゼロと書きましたが、私は今、地域の未来・志援センターに出向というか、そこでスタッフをやっていますが、同じような事業ですので、私も空いた時間を使ってやっているというような状態です。専従職員を雇いたいけれどもお金がないというのもあります。これから、どうしていこうかということで、助成金申請をして、委託事業を受けたらいいということもあります。あとは、今年2年ぐらい NGO センターの地域提案型の研修を受けさせてもらいまして、自由に使えるお金を作りたいということで、事業収益をどうやって上げていけばいいかということも考えています。その一つの柱として、先ほども言いました研修受け入れ事業が、収益を上げるという意味でも大事になってくるかと考えています。ただ、なかなか研修を受けていたころと、課題は同じでそれが解決できたのかということ、まだなかなか解決できていないという状況ですが、もちろん、専従職員を雇ってやっていきたいということは常々思っています。

石田：ありがとうございます。

龍田：よろしいですか。まだまだご質問やご意見があるかと思いますが、まずは次の話題

に移らせていただいて、その後、お時間がありましたら、まとめてまたご質問を受けようようにさせていただきたいと思います。河合さん、どうもありがとうございました。

河合：ありがとうございました。

龍田：続きまして、DIFAR の瀧本さんからご報告いただきたいと思います。

瀧本：では、泉京・垂井さんみたいに基礎情報や国の情報などを全然準備してこなかった、たった4枚のスライドです。私たち DIFAR は 2013 年から 2018 年の間でこちらの JICA の草の根パートナーのほうを頂いて、5 年間のプロジェクトを実施しました。プロジェクトはバジェグランデ市における新しいゴミのリサイクルシステムの導入という形で第 1 フェーズとして 5 年間のプロジェクトの中で、バジェグランデ市は 15,000 人くらいの人口ですが、バジェグランデ市の約 1,000 家族のマーケットと 20 の学校と事業所、ほぼ、80%の人たちに対して啓発を行いました。約 60%の人たちが今、5 年間で、各家庭でゴミを分別して、市が回収システムを作り、生ごみは堆肥化されていて、資源ごみは資源ごみのルートとしてボリビアの近くの町に資源ごみを販売するというリサイクルシステムを 5 年間で導入することができました。今、第 2 フェーズを申請させてもらっていて、3 月に結果が出るということで、はらはらしながら待っている状況です。

このプロジェクトを 5 年間やる中で、いろいろなご縁がありました。私もボリビアから日本に研修や報告会という形で日本に帰ってくる中で、ボリビアには日本と比べたら例えば、当たり前前かが当たり前でないとか、ゴミに関してもの非常に遅れているという状況があるのですが、またボリビアにはない日本の特別の国内の課題というのも帰ってくるたびに気になるという状況があります。私たちはボリビアに行って、ボリビアを対象にした海外で活動する NGO ではあるけれども、国内の人たちに何かつながるといふか何か貢献できることがないかというのは、だいぶ前から帰国をするたびに思っていました。

その中で、報告会を帰ってくるたびにさせてもらって、今回も、私は 4 カ月、来月またボリビアに帰るのですが、そういうこともあって、今日この協議会でせっかく帰ってきたのだから、報告したらということで機会を頂きました。その中で、いろいろな報告会をする中で報告会を聞きに来てくださる方の反応というか、前は「ボリビアはすごい国だね」「すごく遅れている」「かわいそうだね」「そんなところで一生懸命頑張っているね」という報告会に参加された方の声があったのですが、最近では、「ボリビアも大変だけど、日本も大変だよ」「そんな遠い行ったこともない一番日本から遠い国に支援するというのも大事だけれども」という声も感想としていただいています。

その中で、愛知県東栄町というところのご縁を少し説明したいと思います。ボリビアのバジェグランデ市という私たちが長らく活動していたところと、愛知県東栄

町ですが、2005年の愛知万博で1市町村1国フレンドシップ事業というのがあったみたいで、私もそのとき日本にいなかったのですが、これは聞いた話なのですが、そのときに愛知県の東栄町がボリビアの担当というか、フレンドシップでボリビアと東栄町がつながりました。その後、2007年から東栄町のほうから声を掛けていただいて、あまり注目されていないというか、あまり知る人もいない団体が近くの東海地方に行って、ボリビアでやっているということで声を掛けていただいて、DIFARが毎年11月に行われる東栄町フェスタの花まつりというところで出店させてもらうことになりました。2007年からずっと毎年、今後も参加させてもらおうと思うのですが、出店することで地域の人たちとのつながりが2007年からできています。

特に東栄町のほうでメインになって受け入れくださる方々というのが、国際交流協会というところなんです。その後、2013年からバジェグランデ市のほうで私たちのプロジェクトが始まって、そのときに、バジェグランデ市の市長さんから、せっかく日本の団体とプロジェクトを決まった期間でやっているのだから、国際交流をしたい、日本のことを知りたい、日本の事例を参考にしたいという要望がありました。国際交流を始める中で、これは草の根パートナーで元々計画していたのですが、行政の人が日本に研修に行って、そして、特にごみのリサイクルということに焦点を当てて、研修をするということをして2017年に行いました。

2017年に市長さんは、市長の役をバジェグランデ市に置いて、遠い日本に2週間来られるということで、バジェグランデ市のほうはせっかく行くのだったら、市長さんが研修するだけではなくて、何か残るものを作りましょうということで、そのときに東栄町に声を掛けさせてもらって、友好推進協定というものを結ぶ運びになりました。その後、友好推進協定というのは東栄町の町長さんとバジェグランデ市長さんが結ばれました。大体2つの市と町ですが、町の規模というのは大体15,000から17,000ぐらいで同じぐらいの規模で、市長さんが東栄町に行かれたときも非常に大きな市でもなく、ものすごく田舎でもなく、大体規模が同じで非常に親近感を持たれました。

そして、2018年にせっかく結んだのだから、何かやりましょうという形で、私たちは毎年DIFARでカレンダーを作成しているのですが、このカレンダーでバジェグランデ市の人たちが「私たちの愛する町、バジェグランデ」というテーマで撮った写真を東栄町の人たちに12枚選んでいただいて、それを今年のカレンダーにするというような協力活動をしたり、また、東栄町のほうで東栄町の写真コンクールというのに合わせて写真を撮ってもらって、それを交換して、お互いにバジェグランデと東栄町の風景や好きなどを交流することも始めました。

このようなことは行政と行政というか、私たちのプロジェクトの中ではやはりごみがテーマなので、バジェグランデ市の行政の人たちと一緒にカウンターパートになってプロジェクトをしていて、今回の友好推進協定は市と町が結ぶものなので、

結局、行政の人と行政の人が一緒にやるという形でした。でも、印象として、少し無理やりやらないといけないからやりましょうかという雰囲気であり積極的ではないというのを感じていました。その中で、今年、私は帰ってきて報告会を東栄町のほうでもさせてもらいました。

これはまた後で報告会の様子を話すのですが、これが毎年参加している国際バザールというところで、東栄町の人たちもいつもここのブースにお手伝いをしに来てくれていて、ボリビアの民芸品やボリビアのやっているプロジェクトの紹介などを行っています。こちらの写真は、東栄町の町長さんとバジェグランデの市長さんが結んだ友好推進協定です。山田ロサリオさんもここにいます。

そして、写真の出し方が悪いのですが、そのときに市長さんが東栄町の小学校を見学されました。見学されたときに学校が非常にきれいで、ボリビアと全然違ってごみ一つ落ちていないという状況で、清掃員の人たちを雇用しているのかという話が市長さんから出て、日本では別に学校で清掃員を雇用していなくて、子どもたちが学校清掃を行っていますということに、非常に驚かれていました。それはどうしたことだ、そのようなことをボリビアでやったら、親がすごく怒って、学校にもものすごくクレームが来て、自分たちの子どもを学校に掃除をさせに行かせているわけではないと言われるから、ボリビアでは無理だという話になりました。そのときは、日本の子どもたちは行儀がよくて、自分たちの学校は自分たちで掃除をして、トイレも掃除するという話になって、それはそれで終わりました。その後、先ほど紹介したカレンダー事業などもして、東栄町とバジェグランデをつなげる何か活動をしたというのが、私たちの思いでもあり、それに応える形で東栄町とバジェグランデ市が国際交流活動を少しずつ始めたという形になります。

先ほど紹介の中で、JICA ボランティアが日本の NGO に派遣されないかという話を私は初めて聞いて、そういう話が進んでいるのだなと思ったのですが、私たちが活動するボリビアにもたくさんの青年海外協力隊の人たちが来ています。これはバジェグランデ市で運動会を行ったときに、みんなでラジオ体操をしているのですが、協力隊の人たちが 13 人か 14 人ぐらいバジェグランデ市で運動会をやるというので、お手伝いをしに来てくれました。そのときにラジオ体操というものをみんなの前で披露したときに、非常に喜んで、ラジオ体操というものも知らないし、日本人の人たちが同じ動きでものすごくばっちりやって全身運動をしているということにボリビアの人たちは非常にびっくりして、ラジオ体操もすごいというふうになりました。このような運動会やイベント的なことを協力隊員さんに声を掛けて一緒にやろうということもありますし、現地で実際に技術を持ってきているシニア協力隊の方たちに DIFAR から、例えば、排水処理のシニアの方がいて、排水処理について話をしてくれませんかなど、そういうことを私たちは結構積極的に進めていきたいです。せっかく日本から同じ国際協力を目的にボリビアに集まっている人たちを必要ととき

に必要なところに必要な人をフレキシブルに呼んだりするのも、在外事務所ではあまり関係されないようなイメージというか、多分、経費のことなどもあるかと思うのですが、現地ですっとやっている私たち NGO としては、そういうことも進めていきたいです。DIFAR に派遣されないまでも、現在、今実際におられる協力隊員の人たちともっとつながっていきたいという意向はあります。

最後ですが、1月に国際交流協会の人たちと報告会をしたときに、掃除の話が出て、この前、市長さんが2年前に来られたときにこのような話がありましたという話をしていたときに、自分たちは地区清掃を頑張っている。高齢化していて若い人たちがなかなか入ってくれないのだけれども、自分たちの地区は自分たちで清掃するという意識の基、地区清掃をしていますという話が出ました。また、前に出た学校清掃の話が出て、そういうことであれば、私たちも協力できるというのを東栄町の人たちから言ってくださいました。

まず、初めにどのようなことができるかといったら、ボリビアでは自分たちの町を自分たちできれいにする。例えば、ごみ拾いや清掃活動というのは、全く私たちがやっている活動地域ではそのような意識というか、そのようなことができる、住民の人たちがその地域の人たちのことを思って、無償で何か動きを作るというアイデアがなくて、ごみに関しては市がやってくれる。本当に少しの税金、まったくコストも足りないような本当に少しのお金を払っているのに、自分たちはごみを捨ててしまっていていいと思ってしまう。小学校のときからどんなに貧しい子どもたちが行く公立の学校でも、学校清掃は清掃員の人たちがやると思って、ごみをばいばい学校の中で捨てていって、次の朝になったら学校がきれいになっているという状況なので、本当に小さいときからごみに対しての教育をそういう形でやっているというのが気になっていました。

そこを今回、東栄町の人たちが自分たちは別に行政に言われなくても自分たちは自分たちでやっているところを市民の人たちがバジェグランデの市民の人たちに伝えるということをやりたいという動きになって、今、私の帰国までに地区清掃のビデオやインタビューみたいなものを作って、ぜひボリビアに持って帰ってくださいという動きがあります。あと学校清掃も、私の子どもが今、小学校と中学校に行っていますが、その学校に声を掛けると、ぜひボリビアの子どもたちに見せるのであれば、ビデオを撮りに来てくださると声を掛けていただいて、明日は小学校でビデオを撮らせてもらいます。

そういった形で日本の人たちが、行政を通して何かやらせるとかやってもらうのではなくて、自分たちが当たり前に行っていることをボリビアでもやれるのではないかとこのところにつながるのが、非常にいい動きだと思っています。そこをディファルトしてつないでいきたいと思っています。海外パートナーなどというのは、海外をあくまでも対象にした日本の技術や知見、経験を海外に対してやるプロジェ

クトという意識だと思うのですが、それをまたボリビアから持ってこられる経験というのも非常にたくさんあると思っています。例えば、ごみと言えば、日本は生ごみや燃えるごみというふうに、生ごみだったら燃やすという意識があると思うのですが、実は、ボリビアでは今は生ごみは堆肥化にどんどん進んでいます。それがいいか悪いかは分からないけれども、生ごみをどうやって燃やすのか全然分からなくて、生ごみは堆肥化する。その流れを作ってきたのは、私たちのプロジェクトもそれに貢献しているし、そこを一緒にやってきた人たちというのは10年以上前からそういう動きがあるのですが、生ごみを混ぜて、堆肥化するというのは汚い、臭いと日本人たちはあまりやらないことだと思います。ボリビアでは、若い学生さんが堆肥を混ぜて、堆肥の温度がどんどん上がって温かくて、そこで堆肥は生きているというので、小学校の子どもたちや中学校の人たちが堆肥作りに参加しているという状況もあるので、若い人たちがやっている、参加しているということをまた日本で紹介したいと思います。

これからの DIFAR の活動を考えたときに、ただボリビアを向いてやるのではなくて、日本の課題ということも考えながら、どのようなつなげ方ができるかというのを意識して今後も NGO 活動をやっていきたいと思っています。

龍田：どうもありがとうございました。貴重なお話をありがとうございました。今のボリビアでの進んでいる部分もあれば、なかなか日本では堆肥を作ろうという動きは出てこないですし、逆にいつも子どものころからやっていた掃除やいろいろな地域での掃除など、自分の町をきれいにしていこうという活動が国際協力になるのかということもお互いにシェアし合えるのかということが分かってとてもいいことを教えていただきました。どうもありがとうございました。

それでは、皆さんから質問を頂く前に、同じボリビアつながりということで、山田さんから少しお話を頂きたいと思います。コメントでもいいですし、ご自分の活動でもいいです。よろしくをお願いします。

山田：せっかくチャンスを与えていただいたので、自分の活動を紹介します。私たちの団体は、日本に住むボリビア人の人たちのための生活相談窓口をメインに行っています。日本語通信講座を初めて作ったのが日本ボリビア人協会です。文科省委託事業で6年間やっています。この日本語通信講座の特徴は何かというと、日本語だけではなくて日本でのマナーやルールを覚えてもらい、初めて日本に来る方が生活に困らないように、とても役に立つ講座です。

また、アルパカニットプロジェクトが去年からスタートしました。50歳から60歳のボリビアの方だけではなくて南米の方は、日本で仕事がなかなか見つからないです。フェアトレードでボリビアからアルパカの製品を持っていますが、仕上げがきちんとできていないから売り上げがなかなか伸びないです。三重県の産業支援センターの助成金で日本の先生に委託して、その先生たちから50歳~60歳のボリビ

ア人の方が編み物の仕上げをきちんと教えてもらって、製品が出来上がると販売ができるようになるという活動をやっています。

また、この活動のメインで皆さんご存じのとおり、分からない方もいるかもしれませんが、EXPO BOLIVIA というイベントをやっています。5年間、東京でJICAさんのお世話になっております。EXPO BOLIVIA は年に2回、東京と三重でやっています。以上です。ありがとうございます。

龍田：どうもありがとうございます。日本でも海外でもそうですが、50代、60代になった女性、男性のシングルの人たちの課題というのは結構大きいです。それに対して、ボリビアのアルパカをどうきれいに製品にできるようにするかということでご指導いただいているということで・・

山田：申し訳ありませんが、50歳、60歳の方が年齢だけの問題ではなくて、日本語を話せないから周りの方と交流できない方が多いです。働いていないと、周りの子どもでも友達でも働いている間にだんだんこっちに行ったり、あっちへ行ったり、ずっと病院にいたりで何とかしないといけないと考えて、今は収入にはまだならないと思うけれども、話すところから、交流できるところが、これが本当の地域づくりです。教えてくれる先生が80歳の日本人です。言葉が全然ないけれども、とりあえず心が通じています。一生懸命に教えていただいています。

龍田：ありがとうございます。すみません。もう時間にはなってしまったのですが、ここであと一つか二つぐらいまで、ご意見、ご感想、あるいはご質問ありましたらお受けしたいと思いますがいかがでしょうか。DIFARさんのお話でもロサリオさんの話でもどちらでも構いませんが、一つだけでも何かありますか。お願いします。

河合：お話の中で現地では生ごみの堆肥化が当たり前だというお話があって、実は先ほど出た揖斐川流域の輪之内町というところでは婦人会が母体となって生ごみをまずなくしたいというので、最初は自分の畑に埋めることから始めて、今では生ごみの堆肥化ができる機械を町から買ってというところがあります。その方々と皆さん来た方を会わせたいなと思ったので、ぜひ、岐阜まで来てもらえないかなと思いました。すみません。感想です。

龍田：どうもありがとうございました。他になければお時間になりましたので、ここで閉めさせていただきたいと思います。阪倉所長から閉会のごあいさつを頂きたいと思います。お願いいたします。

阪倉：閉会のあいさつということでもないですが、今日は2時間の協議会にご参加いただきましてありがとうございました。私自身もいろいろと参考にさせていただくことが多かったと思います。特に後半の河合さんと瀧本さんの説明発表は大変参考になりました。元々、瀧本さんのDIFARはJICAの草の根をやられているということで、計画などは聞いていましたので、非常に実際にそうだったのだということがよく分かりました。逆に河合さんの泉京・垂井さんの活動というのは私の勉強不足でそこ

まで詳しく知らなかったので、今日お聞きして、非常に興味深い活動をされているということが分かって本当に参考になりました。

泉京・垂井さんの地域に愛着を持って、長く暮らし続けられる町というビジョンは何気ない言葉ですが、非常に重要で本当に JICA で国際協力をやっている中でも、やはり何をゴールに仕事をするのかというところで、今、泉京・垂井さんが言われたようなビジョンというのは、垂井町という町で長く住み続けられるということと、それぞれの途上国でその国の人がそう思えるかどうかというのは、全く同じだと思います。

まさに、泉京・垂井さんが建築なども受け入れられていると聞いて、どうしても JICA と NGO さんの関係は草の根技術協力で連携するところが確かに多いですが、そうではない連携の形というのはたくさん実はあります。今日も参加されている河合さんも兼業されている地域の未来・志援センターの母体と言っているのかわかりませんが、中部リサイクル運動市民の会さんには JICA は研修事業をお願いしているという関係もありまして、ここに研修業務課長もいますが、丸々課題別研修を市民の会さんをお願いしています。まさにリサイクル分野だけではなくて、地域おこしや町づくりでも連携の可能性があるような気がしました。ということで、本当に参考になったと感じています。

年も 2019 年になりまして、暦年で考えますと JICA としては幾つかイベントのようなものがあります。例えば、8 月に TICAD7 というのがありまして、これはアフリカ地域に特化したテーマにはなるのですが、横浜で第 7 回のアフリカ開発会議というのがあります。ですから、今、JICA も東京のアフリカ部はそれに向けて、とにかくアフリカへの支援をこれまで以上に力を入れていこうということで全社的に取り組んでいるところです。ル・スリール・ジャポンさんもいらしているので、まさにアフリカ関係で今後も連携という話もいろいろ出てくるのではないかと思います。11 月には G12 の外相会合というのが、本会合は確か大阪であるのですが、外務大臣会合というのが 11 月に名古屋であります。G12 の半分ぐらいが先進国ですが、そうでない国もあり、また、アウトリーチ会合でいろいろな途上国の参加も見込まれます。そういう中で、ここ名古屋で新しい話が進んでいく、いろいろな国との話が進んでいくこともあると思いますので、一つのスキームにとらわれず、いろいろな形の連携があると思いますので、またこのような場も含めて相談というか話をさせていただければと思っています。今日はあまり長くなってもあれですので、引き続き今年もどうぞよろしくお願ひいたします。ありがとうございました。

龍田：今日もどうもありがとうございました。これで第 13 回中部 NGO-JICA 中部地域協議会を終わらせていただきます。どうもありがとうございました。